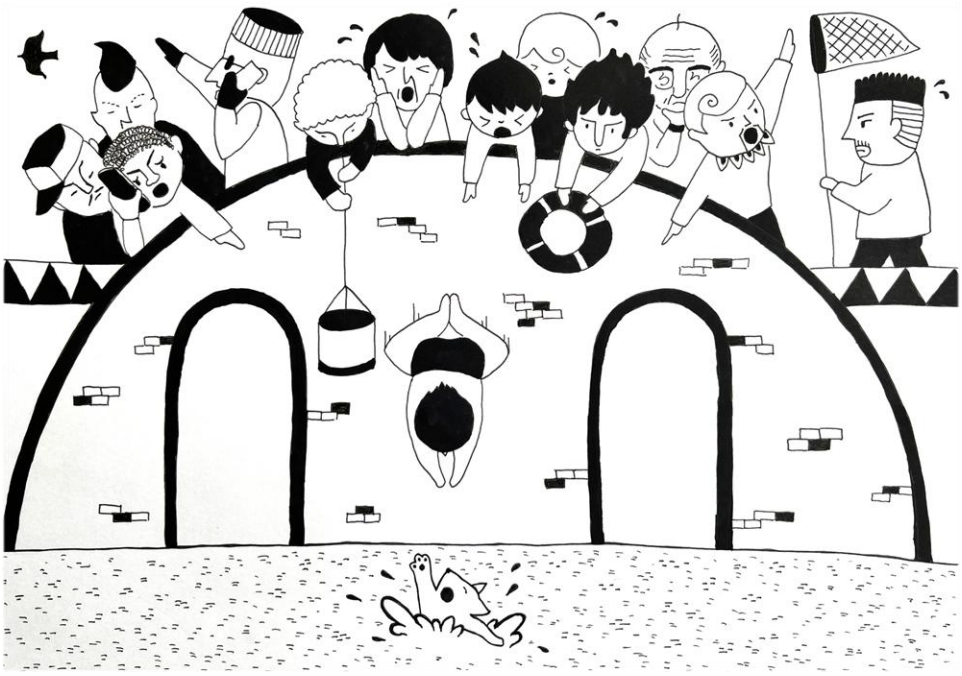
点と線

No. 118

発行人　澁澤　茂
発行所・事務局　一般社団法人千葉県社会福祉士会
〒260-0026 千葉県千葉市中央区千葉港４番５号
千葉県社会福祉センター５階
ＴＥＬ０４３-２３８-２８６６
Ｆａｘ０４３-２３８-２８６７
http://www.cswchiba.com/
E-mail: office@cswchiba.com

特集　「垣根をぶっこわせ！　型にはまらない福祉とは？」



「ツバメが低く飛ぶと雨が降る」「夕焼けの翌日は晴れ、朝焼けの翌日は雨」「風邪をひいたらネギを喉に巻く（食べる）」―これらは、後になって科学的根拠が明らかになった昔からの言い伝えです。あなたも一度は耳にしたことがありませんか。

目に見えるものだけが全てではないという価値観を大切にしてきた私たちだからこそ、一人ひとりの特技や経験、そして個性を活かして人と人をつなぐことができるはずです。そうして、心の循環型社会を築いていけるのではないでしょうか。

≪　CONTENTS　≫

２　特集　垣根をぶっ壊せ！　型にはまらない福祉とは？
６　被災地活動体験記
８　「飲む、知る、つながる」が寄付になる！
９　社会福祉士の「わ」
１０　認定社会福祉士のこえ
１１　地域集会　「福祉道場」
１２　事務局だより

介護保険外サービス
福祉に強い便利屋
グランドール
とにかく何でもやります！
☎ 080−8166−3774
https://benriyagrandeur.com

FUTABA　総合葬祭 二葉
ご事情に合わせてお手伝いさせいただきます。葬儀費用やご遺骨のお預かりにつきましてもお気軽にご相談ください。
◆永代供養墓 3.3万円（税込）
◆直葬 16.5万円（税込）
24時間365日対応
0120-918-512

特集

垣根をぶっ壊せ！型にはまらない福祉とは？

実籾パークサイド 命をつなぐ複合拠点

私たち福祉楽団の複合型福祉拠点“実籾パークサイド”は、約四年半の準備期間を経て、三月一日に開設しました。

ここは、児童養護施設を主として、一時保護所、子どものショートステイ、ソーシャルワーク機能としての児童家庭支援センターと、子ども・子育ての課題について軽度から最重度まで包括的に対応する機能を持ちます。

かつ、看護小規模多機能型居宅介護、認知症対応型のグループホーム、障害児の放課後等デイサービス、障害者の就労支援、在宅診療所などを併設しています。多世代・多様な人が生活する場です。

なぜ複合型で多機能な施設であるのか。人の抱える困りごとは一つだけということはありません。それが多ければ多いほど、絡み合えば絡み合うほど、その困難さは極まっていってしまい、結果として死を選択するに至ることもあり得ます。この理不尽な死、あるいは強いられた死を防ぎたいのです。そのために何らかの役割を果たしたいという思いが根底にあります。

昨年度の小中高生の自殺者は五二九人で過去最高となっています。直近のユニセフの調査では、日本の子どもの身体的健康は三六か国中一位ですが、精神的幸福度は三二位となっており、上記の自殺者数の多さがこの順位に大きな影響を与えています。子どもの体と心にパラドックスを生じさせている社会状況があると言えます。

また国内では、少子化の一途を辿っている一方で、児童虐待の相談対応件数は２２５，５０９件とこれまた過去最高となっています。虐待で亡くなる子どもの数は年間七二人であり、五日に一人が命を落としているのです。

一般社団法人Ｏｎａｒａという団体による「社会的養護未経験児童虐待被害者の実態調査」によれば、支援や制度から漏れてしまった子どもたちのその後の人生は、①精神科受診歴あり８４．３％（日本全体では３．９％）、②生活保護受給率１６．４％（日本全体では１．６％）、③可処分所得百四十万円以下６３．８％と示されています。

上述の調査結果だけでも衝撃的ですが、最も驚くべきこととして、自殺願望率９１．１％、自殺未遂率６１．３％（日本全体では二〇二一年度で２％）ということなのです。子ども期に受けた虐待は大人になってからも大きな影響を及ぼすことがよくわかります。

子どもたちの抱える「息苦しさ」は、まさに「生き苦しさ」であり、死に直結するリスクが高まっている状況は重大な社会課題です。

そして子どもの状態は大人社会の写し鏡でもあります。子どもが苦しいのであれば、大人だって苦しいはずです。子どもへのケアは当然ながら、その近くにいる大人たちが笑顔でいられること、ひとりぼっちにならないこと、困っていることは「困っている」と言えること、がとても重要なことだと考えます。

人と人との関係性が希薄な時代です。親族や地域を頼ることもかつてのようにはいかなくなっています。孤立・孤独は、ただでさえ解決が難しい生活上の問題にさらに拍車をかけ、負のスパイラルを引き起こしてしまいます。

そのような立場の人に対して、誰かが友達のような、親戚のような、ご近所のような存在として寄り添っていくことが求められる社会に既になっているのではないでしょうか。私たちはこの施設の機能を活かしながらその一員になりたい、この場所が人と人とをつなぐハブになれればと思っています。

包括的な相談支援の必要性は今後より求められていくと思いますが、一時的～中長期での生活の場があってこそ、その充実は図られるものと考えます。実籾パークサイドはそこに応え得る、ある意味では社会実験場になります。

施設内の各事業所はそれぞれで存在するのではなく、有機的に交わり合います。そして何より大事なことは地域との協働です。塀もフェンスもない、地域に徹底的に開くことをコンセプトとしており、人が自然と行き交えるような設えとしています。それがふつうの人の生活だからです。

専門職に委ねられ過ぎた福祉は、利用者にとって管理的になっていないか、社会からかけ離れたものになっていないか、それを常に自問自答していく必要があります。

だからこそ、地域と地続きであるべきであり、よき隣人同士として、互いの痛みを分かち合い、支え合う関係性を築きたいと願っています。

敷地内を近所の方が犬を連れて散歩しています、暮らしている子どもたちの学校の友達が遊びに来ます、誰でも使えるバスケットコートでは休日になれば二〇～三〇人が集っています、地域交流スペースは高校生の自習や憩いの場となっています、高齢者のデイサービスの送迎に子どもが同行することもあります、子どものぬいぐるみのほつれを高齢者の方が繕ってくれたりもします。

これからもそんな生活を営みながら、福祉を超えた様々なチャレンジをしていきたいと思います。

福祉の「当たり前」を変える。日中一時支援事業所【ララホーム】&【カフェコッソリ】の挑戦

社会福祉士は、地域における支援の担い手です。しかし、福祉が時に「特別なもの」「囲われたもの」として見られがちな現状に、もどかしさを感じている方もいるかもしれません。カフェコッソリの取り組みは、そうした壁を取り払い、多様な人々が地域の中で自然に「共にいられる」場を創出する試みです。今日は、ＮＰＯ法人生き方応援団ララ代表、そして、カフェコッソリの運営を行う合同会社ココロカラダの代表執行社員でもある山田賢明氏にお話しを伺いました。

■“ひきこもりが本気で心と向き合ったらこんな社会貢献のお店ができました「カフェコッソリ」”は、地域の方々も自然に訪れる、開かれた場所ですね。どのような思いで始められたのですか？

まず前身として、ＮＰＯ法人の方でやってきた日中一時支援事業【ララホーム】の活動があります。カウンセラーとして、カウンセリングの無償提供と居場所における課題との対峙を促してまいりました。精神疾患、精神障がいをお持ちの方々と向き合い続ける中で、社会の中に馴染むためにはもう一工夫必要だと思いました。従来の障がい者雇用や作業所とは異なり、カフェコッソリはＮＰＯ法人とは別で合同会社を作り、元ひきこもり当事者や、元ララホームの利用者である障がい者達を普通の会社の普通の社員として雇用し、定款の中にも代表執行社員のところに彼等の名前を置いています。

■「障がい」という属性の考え方が従来のものと違うように感じます。ご説明いただけますか？

そもそも「障がい」というものを精神障がいの場合は慎重に見るべきものだと思っています。意思決定支援の名の下に聴き取りを行っていると思うのですが、そもそも聴き取りのレベルから見直すべきではないか？と思います。常識や通常を重んじ、学び得てきた感覚で自身の状況を責め、苦しんでいる方々の言葉から真実をしっかりと見出さねば、危険だと思いませんか？しっかりと聴き取ると、健常者と呼ばれる人達と何ら変わらぬ、夢や願いが出てきます。無謀であろうが、非現実的であろうが、それをどうすれば叶えられるか？共に考え、共に歩む姿勢を大切にしたい。

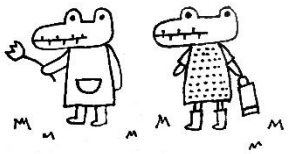
カフェの名前である「こっそり」は、コッソリと社会へのメッセージを投げかけているんです。障がいを隠すのではなく、自然に存在し、「障がいを経験に、その経験を価値に！」という発想もそのひとつです。障がい者を分野別にカテゴリー化、障がい者に仕事を与えるという上から目線の支援体制、根深い社会の認識に疑問を呈しているんですが。

■地域に開かれた場所であることで、制度的な福祉が難しかった部分をカフェという形で創出したのでしょうか？

そうです。世の中の精神障がい者の認識を変える事が重要だと思っていて、その為には世の中の認識から脱却する努力が障がい者側にも必要です。前身であるララホームという場所ではそれをずっと当事者の方々に提案してきました。信じられないような改善、信じられないような奇跡が沢山この場所で起こっています。しかしながら、あくまでも福祉事業所なんです。支援者がいて利用者がいるそれでしかないんです。施設内の空気は全く別ですが、残念ながら社会の視点はこれでしかないんです。なので、そこで良くなった人達の姿を見せるなら、福祉じゃダメだと思いました。「障がいを経験に、経験を価値に！」ってところを打ち出すなら社会貢献の表に出した、ああいうお店で彼らを成功させなきゃいけないんです。運営の面でも、少し斬新なシステムを取り入れています。寄付金制度があって、寄付をいただくと生活困窮者の方々が無料でご飯が食べられる券が発行されます。飲食以外の形で収益を上げることで、飲食店全体が持っている課題にも取り組んでいます。福祉が制度に依存することで事業を継続する。その為に利用者を抱え込むような既存の在り方ではなく、多様な形で価値を生み出し、企業と福祉、地域と福祉の連携によって持続していくモデルを示したいと考えています。

■それは、福祉事業のあり方自体を問い直す試みですね。地域の中で、福祉がより開かれ、柔軟な存在になる可能性を感じました。

既存の医療や福祉だけでは満たされていないニーズはまだまだあります。これからは、社会全体が視点を広げて、当事者の方々の可能性を自由に考え直せる機会を増やしていく必要があります。そして、最終的にはしっかりとした意志を持ってほしいと思っています。将来的にはカフェに限らず、様々な業種に挑んでいけばいいと思いますし、「障がいを経験に、経験を価値に！」という意識を本当に持てたら、何か新しいことを生み出したりする人がきっと出てきます。精神科医療の患者さんになるだけではなく、主体的に社会に関わっていく力を取り戻すのが望みです。



■まさにエンパワメントですね。私たち社会福祉士も、制度の範囲内で収まらず、考えて行動していく必要がありますね。

そうですね。自分で考えるのが当たり前なのに、それが出来ていない人もいる。カフェコッソリという場所は、来る人達が、そして関わる私達が、常に「これでいいのか？」「どうすればもっと良くなるのか？」と問い続け、共に変化していく場所でありたいと思っています。

カフェコッソリは、障がいのあるなしに関わらず、誰もが「ありのまま」でいられ、そして自分自身の価値を考える、地域に根差した新しいカフェであり、居場所です。全然コッソリしてませんが、ぜひ、美味しい食事と3Dラテアートなど、働いてる元当事者達の姿と共にお楽しみください。

福祉相談×居酒屋×就労支援!!
アドカラー（松戸）
～専門職は地域で遊んで、色を加えて～

アドカラー
Add Color

「アドカラー」とは、靴の補修をする色付きクリームのこと。そこから転じて、「人とまちの日常に、色を添える」をコンセプトにした日替わりコンセプトスタンドとして、クラフトビールや家庭的なおつまみを楽しむことができる新しい形の居酒屋が誕生した。

福祉×居酒屋なんて聞いたことがない。しかも提供されるクラフトビールはビール好きも納得の味と香りで、お料理も本格的。そして、このお店の仕掛け人はソーシャルワーカーだというので、驚いた。

仕掛け人の宮間恵美子さん、ＨＩＲＡＴＡＹＡ　ＳＡＴＮＤのママ、平田智子さんに話を伺った。

■お店を出すきっかけは？

もともと私はお酒好き、お料理が好きで、自宅をカフェにしてお店がしたいという夢がありました。そこに、東向島のイワタヤスタンドとの出会いやクラフトビールとの出会いがあり、街づくりイベントで宮間美恵子さんとの再会があり、偶然にも期間限定で場所を借りられることとなり、じゃあやってみようということになりました。

■実際に、福祉の相談はありますか？

事務所の一画で「相談できますよ」「相談してください」とブースをひろげても、相談にくる人は少ないです。お酒や食事を楽しみながら、お喋りしたくなる雰囲気で、リラックスして相談できることもあると思います。実際、前回のクラフトビールフェスでは七八人の相談がありました。また、スタッフのほとんどは福祉関係者で、さまざまな分野の専門職がいるのも強みです。

■スタッフやボランティアの方はどのような方がいますか？

先ほど、スタッフは福祉関係者と話しましたが、実は有償ボランティアの方もいて、就労支援の一歩手前のような活動もしています。例えば、人前でお話するのが苦手な高校生などを受け入れています。アルバイトをしたいけど踏み出せない。経験や自信がなく、一歩を踏み出せない方を受け入れて開店前の仕込みのお手伝いをお願いしています。例えば、ビールのラベル張り、餃子の仕込みや店内の清掃などです。飲食店は仕事を作りやすいので、体力的に月一回だけお手伝いにくる方などさまざまなニーズに対応できます。働きたいならまず手帳を取ってきてというと来なくなることもありますよね。ここでは、働きたい人は全員が対象です。また、そのような活動を知ったお客さんが、手伝いにきてくれたりして支援の輪が広がっています。

■素晴らしい取り組みですね。今後の課題などお聞かせください

この場所は、今年の八月まで期間限定の運営なので、その後をどうしていくか、悩んでいるところです。アドカラーを通して、人とのつながりの中で「多様な人がはたらく」ことの可能性、支援者が楽しみながらエンパワメントされていく様子が感じられていて、継続し発展していく方向性を模索しています。地域共生社会を具現化する取組みをアドカラーに関わる皆さんと続けてたいと思います。

被災地活動体験記

特別養護老人ホーム空（八街市）
加藤　幸夫（かとう　ゆきお）

～ボランティア活動を通じて見えた「つながり」の力～

まずは二〇二三年に発生した能登地方を中心とする震災で被害に遭われた皆様お見舞い申し上げます。メディアでは復興に向けての報道がある一方で、被災された方々に話を聞くと心の復興は始まったばかりだと痛感しました。今回は、私が関わったみなし仮設相談支援ボランティアを通しての感じたことをまとめさせて頂きます。

私が参加したのは、令和七年一月、三月の計六日間、金沢市内のみなし仮設住宅での相談支援活動でした。みなし仮設住宅とは、公営仮設住宅が提供されるまでの間、民間の住宅などを借り上げて被災者に提供する仕組みです。一見すると普通の住宅での生活のように見えますが、被災者の方々にとっては知らない土地での新しい生活を始める苦労が伴い「孤立感」や「将来への不安」が大きな課題となっています。

活動の中で印象的だったのは、被災された方々が抱えるさまざまな思いでした。「自分の代で土地を失くし先祖に申し訳ない」という心情を打ち明けられた方や、「誰もいなくても輪島に帰る」という強い意志を語られた方もいらっしゃいました。また、息子様が「金沢に残ってほしい」という願いを持ちながらも、ご本人たちが地元に帰りたいと強く望むという、家族間での葛藤が生じている場面も少なくありませんでした。前に進むことは難しくとも、話すことで現在の状況を整理し直し、ご自身の心の中で次への準備を整えていくプロセスが重要だと感じました。それは決して容易なことではありませんが、対話を通じて被災者の方々が少しずつ心の整理を進めていく姿を目の当たりにし、寄り添うことの大切さを改めて実感しました。さらに、これらの相談支援活動は、全国から集まった社会福祉士や専門家の尽力によって成り立っており、児童福祉・障害福祉・介護保険・住宅、金融等それぞれのスキルや経験を活かしながら、被災者一人ひとりに寄り添い、個別のニーズに応えていく姿に、私自身も多くのことを学ばせて頂きました。

活動を通じて感じたのは、「つ

ながり」の重要性です。一人では解決できない問題も、誰かと共有することで心が軽くなり、解決の糸口が見えることがあります。また、被災者同士のつながりの場を作り、新たなコニュニティーを作り出す場面にも立ち会うことが出来、つながりや役割の重要性を実感致しました。

震災や災害の記憶は時間と共に薄れていくものです。しかし、被災地での支援が必要な状況は続いています。この経験が、今後も支援活動に関心を持ち続け、多くの方々とつながりながら行動するきっかけとなればと願っています。

ちばぎんハートフル株式会社
櫻井　慎一郎
（さくらい　しんいちろう）

二〇二五年三月の半ば、ようやく寒さが緩みつつある中、生活支援相談員として金沢市で三日間、活動してまいりました。みなし仮設となっているアパート、公営住宅の各家庭に戸別訪問し体調や困りごとをお聞きするのですが、訪問周期が抱える問題に応じＳＴＡＲＴ法（トリアージ）により一ヶ月、三ヶ月、半年ごとのように決められており、三日間で四十件強のお宅に訪問。不在のご家庭には携帯電話に連絡し近況をお聞きし記録、報告してきました。

震災から一年二ヶ月、豪雨被害から五ヶ月が経過し、勤め先が維持され定職がある方は落ち着きを取り戻している様子でしたが、殆どの方は未だに今後の住まいや生活への不安が未解決のままで「どうしようもないが、どうにかしてほしい。どうにか安心したい」という気持ちの中で藻掻いているような印象を受けました。既に地元に戻っている方もいらっしゃるようですが、未だに水道も復旧していない地域がありまだ一～二年はかかること、建築費は高騰し業者も少ないこと、四つあった病院も一つに集約される予定であること、寺も檀家の大幅減少で畳むことを検討していること等、仮に自宅を再建できても、ハード・ソフト両面が揃わず先行きが見えにくいようです。また残念ながら、避難所間の移動等、環境の度重なる変化で、障害者や高齢者は症状が悪化する等、弱者は厳しい状況に置かれてしまうことも実感しました。スマホや車等の足がない高齢者家庭はアクセシビリティが不十分で、病院情報も不足しているようでした。

私の滞在時は、老人介護、児童相談、ＭＳＷ、障害支援を専業とする社会福祉士が集っていましたが、皆様の知識や行動力の高さには感服しました。訪問時に「俺たちにこれからどうしろというんだ！」と怒り声を挙げていた九十代のお年寄りにも、その後一時間しっかりと傾聴することにより最後には笑顔で見送っていただけるようになったり、病院情報が不足している方には近隣の情報を調べてすぐに連絡したり、と気持ちと志を持った姿勢は大変参考になりました。

最後になりましたが、千葉県社会福祉士会災害対策委員長　服部様および事務局　石渡様には沢山の情報と温かい送り出しを受け安心して活動することができました。有難うございました。

「飲む、知る、つながる」が寄付になる！

社会福祉士
准認定ファンドレイザー
根本　真紀（ねもと　まき）

田中成幸さん（発起人）　高橋麻子さん（大学ファンドレイザー）　根本真紀さん（ソーシャルワーカー）

ノムキフ　公式 instagram
https://www.instagram.com/nomukifu/

日本酒を飲むと社会課題に取り組む非営利組織への寄付になる「ノムキフ」。そんな夢のようなイベントが始まったのは二〇二三年六月のこと。そこから回を重ね、二〇二五年五月末現在、二十回ほど開催してきました。

仕組みは簡単。飲食店で飲む時くらいの参加費を設定し、集まった金額から日本酒やおつまみ等の経費実費を差し引いた残りの全額を協働するＮＰＯに寄付するというものです。運営はボランタリーに行われています。

もともとのはじまりは、子ども若者分野で中間支援を行う田中成幸さんが全国出張する際に各地の日本酒に出会い、現在国内での消費量が減って来ていて、蔵の後継者不足にも悩む日本酒の魅力を他の人とも分かち合いたい、なおかつ様々な取り組みをしている団体のことも知ってもらいたいと発案し協力者を募ったところ、真っ先に手を挙げたのが大学でファンドレイジングのお仕事をしている高橋麻子さんと、ソーシャルワーカーである私、根本。三人をコアの「キフバーテンダー」として、全国のＮＰＯと協働での取り組みがスタートしました。

奇しくも三人とも認定ファンドレイザー／准認定ファンドレイザーという資格を持っています。これは、非営利団体の活動に必要な寄付や助成金などの資金を獲得すると同時に、寄付の裏側にあるさまざまな課題や、それを解決するための方法を一緒に発信し、仲間を集める専門家です。

「ＮＰＯの活動に興味はあるけれど、説明会やボランティアに行くほどでもないし、寄付ってよくわからない」

「ＮＰＯの活動はよくわからないけれど、美味しい日本酒を飲みたいし、色々な立場の人とつながりたい」

こういう方は少なくないと思います。そんな方のＮＰＯとの最初の出会いをコーディネートできたらと願っています。

日本酒には、人と人との縁を取り持つ力がありますが、ノムキフはそれだけではなく、社会課題やそこに取り組む人や組織との接点も紡いでいけるよう「ノシツキ」を目指しています。

ノ　飲む
シ　知る
ツ　つながる
キ　寄付になる

ノムキフ

実際、社会課題やＮＰＯ活動にはそれほど関心はなかったけれど、とにかく日本酒が好きという方がノムキフをきっかけにＮＰＯに興味を持って下さったり、ある団体のノムキフに参加したことがきっかけで、他の団体のノムキフにも参加してつながりが広がったり、ノムキフでの出会いから新たな企画につながったりと様々な展開も生まれています。

また、例えば千葉の団体と協働で開催するときは千葉の地酒といったように、ご当地の日本酒をチョイスすることも多く、あまり店舗等に出回っていないお酒が登場することもあり、新たな酒蔵との出会いも参加者の皆さんに好評です。

日本酒をハブに多様な出会いのきっかけを作るノムキフ、これからも様々なところと協働して開催の機会を広げていけたらと思っております。

障害や難病のある方を多数雇用する花屋、ローランズさんで開催したノムキフの様子（2024年6月）
https://lorans.jp/

社会福祉士の わ

袖ケ浦市長浦地区
地域包括支援センター
古川　茂（ふるかわ　しげる）

私は今、地域包括支援センターで社会福祉士として働いています。「この街には高齢者しか住んでいないのでは？」と思うくらい沢山の方が相談に来られます。

包括で働く前は、大学を卒業し三十年ほど障害分野でお世話になりました。そんな自分が高齢分野で働くきっかけは、七年前父が病気療養した時に遡ります。

父が入院した病院で退院カンファレンスが行われた時のこと、ごく自然に「自宅に戻りたいなぁ」との思いを父が伝えました。関係する皆様から「私たちがいるので安心してください」との力強い言葉をいただき、在宅での生活を支えていただきました。

父は介護認定の結果が出る間も無く亡くなりましたが、在宅診療、訪問看護、在宅介護サービスの支援を目にして、在宅の福祉、医療を取り巻く環境が「これほど整っているのか！」と驚かされました。もちろん、母の支え無くして在宅療養は成り立つものではありませんでしたが「機会があれば、いつか高齢・在宅福祉の分野の仕事で恩返しできれば…」との考えが芽生え、月日が経ち今に至ります。

包括業務開始前に、十分な研修や引継ぎがありましたが、なにせ初めての高齢、包括です、内心は初心者マークを貼りたいほどドキドキでした。初心者マークから二年が経ち、職員はもちろんのこと、ご利用者様やご家族、地域住民、民生委員、社会福祉協議会、市の各課、ケアマネジャー、福祉事業所、医療従事者、成年後見人等々の皆様との出会いや繋がりに支えられ、なんとか仕事を続けられています。

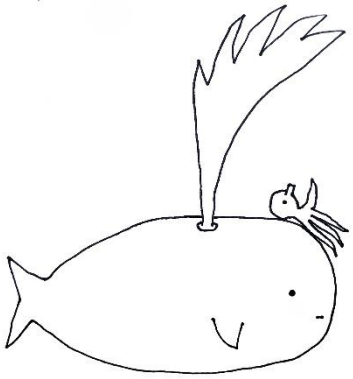
先日、仕事に関係する皆様とお酒を飲む機会があり、楽しすぎたのか深酒をしたようで、途中からの記憶がありません。飲酒によって、記憶を司る脳の海馬の機能が一時的に低下し、記憶の形成が阻害されたための様です。後日、飲んでいた時の様子を伺い、楽しかった様子がわかり安心しましたが、全く身に覚えがないのです…認知症の方の気持ちに少し触れた気がしました。

地域から「認知症だから施設へ」という言葉をよく耳にします。認知症になられた方が、どのように暮らし、どう生きたいか等関係なく聞かれる言葉です。

実は、認知症になられても、沢山のできることがあり、できない部分の支援を受けることで、住み慣れた場所でまだまだ生活していけるのですが「地域は認知症にどれだけ寛容になれるか？」「包括はどう関われるのか」考えさせられることは多くあります。

包括での仕事も二年が過ぎ、少しは地域、高齢、認知症の方に“安心”を伝えられる存在になれていると良いな…と思います。

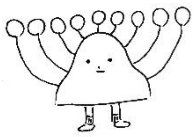
寄稿に寄せて今の仕事を振り返る機会を頂きましたこと感謝申し上げます。



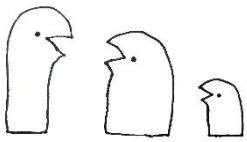
認定社会福祉士のこえ

マルカルコ社会福祉事務所
福間　勝可（ふくま　かつよし）

この四月に認定社会福祉士になりました、まだ新米ホヤホヤの認定社会福祉士であります、福間と申します。この制度があるのを知ったのは、今から十年以上前のことです。日本社会事業大学の専門職大学院で学び始めた頃に、専門職大学院のカリキュラムの中に認定社会福祉士の単位として認められる認証科目があることを知りました。その頃は、特に認定社会福祉士に興味があったわけではなく、ただ単にその科目を受講していただけでした。その頃から十年以上が経って、基礎研修Ⅲの履修が終わりに近づいた頃に、認定社会福祉士の取得についての説明があり、しかも十年以上前に日本社会事業大学で取得した単位が認められることを知りました。また、当時受けていたスーパービジョンの単位も認められるとのことで、取得まで自分が割と近い位置にいることが分かりました。それならば、取得を目指してみようか、といった本当に軽い気持ちでチャレンジしてみた感じです。まさに、「そこに山があるのなら登ってみようかな、頂上からそれほど遠くない位置にいるんだし。それに、頂上に上り詰めた時にどんな景色が見れるんだろう？これまでと違った景色が見られるのなら、見てみたい」といった、本当に漠然とした動機でしかありませんでした。



「苦労は買ってでもしろ」ということわざがあります。また、アテネ五輪の女子マラソン金メダリストの野口みずきさんは、「走った距離は裏切らない」ともおっしゃっています。それはまさにソーシャルワーカーにとっての研鑽についてもあてはまると私は思っています。私の場合は特にスーパービジョンを受けたこと、それが何よりも社会福祉士としての実践の支えになったような気がします。特に一時、地域包括支援センターの相談員として働き始めた頃、施設職員から地域福祉への鞍替えにとても苦労していた時期がありました。そんな時に、「スーパービジョンを受けてみよう。地域包括支援センターの実践に詳しいスーパーバイザーにスーパーバイズしていただいたら、得るものがあるかもしれない」と思い立って、スーパーバイザーの登録名簿を見ていたら、地域包括支援センターの研究をされている大学の先生を見つけて、依頼のメールを送ってみたところ、「お会いしましょう」とお返事をいただきました。その時から数年かけてスーパーバイズを受けるために定期的に大学に通う日々が始まりました。もしもスーパービジョンを認定社会福祉士を取るだけのために受けるのだとしたら、それはこの上なくもったいない。そうではなくて、社会福祉士としての成長につなげるため、そしてまた心の支えになるという効果は絶大な物があると思います。まさに教育的機能、支持的機能です。まだ認定社会福祉士としての自覚はそれほどない自分ではありますが、認定社会福祉士と名乗って実践を続ける限り、翼を広げて大海原の上を飛び続けるカモメのように、さらに上空を目指して飛び続けたいと思います。



地域集会

福祉道場

柏我孫子野田流山地域

福祉道場世話人
社会福祉士　山口　利史
精神保健福祉士　鈴木　将人
並木　徹

『多発性硬化症の方を支えるために　～ともに考える～』

福祉道場は、平成十九年五月から奇数月第三水曜日　十九時～二時間程度、開催しています。コロナ感染拡大により集まって開催することが困難になりオンライン開催してからは、遠くの方にも参加いただいています。三月は、膝付け合わせ語り合いたいが、多くの人に参加してほしいという思いで、集合とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。

さて、みなさんは「多発性硬化症」という病気をご存知でしょうか。だいたい一万人に一人か二人という発症率の病気です。そのため、当事者ご本人やそのご家族と関わっている福祉職も少ない状況です。

今回の稽古の企画背景には、「多発性硬化症の患者を支える会」が、地域に必要だという想いを持った方と、福祉道場世話人との出会いがありました。会の立ち上げの課題は、（当事者が少ないからか？）身近なエリアで出会い、交流する患者や家族同士が出会えていないということです。

福祉道場の今までの参加者へのメール配信、社会福祉士会のホームページやメールで情報配信していただき、一七名が参加し勉強しました。

当日は、郡司　千代子氏と箕輪和子氏（訪問看護ステーションしおり代表取締役）から病気や症例を解説していただきました。

多発性硬化症は、リンパ球の異常により、脳や脊髄などの中枢神経が傷つけられ、神経が障害される病気です。治療法も選択肢は増えてきており、早期治療が重要ですが、詳しい原因はまだ分かっておらず、発症後、いくつも医師を回って、やっと診断がついたときには、進行してしまっていたということもあります。そのため、障害を抱えることとなった患者には、受容しがたいものがあるのだろうと思います。

その背景を抱え、孤立している患者が外へ一歩踏み出すきっかけとしては、同じ背景を抱えた患者や家族、病気を理解する方との関わりが有効になると思われます。

今、患者家族の会（仮）の立ち上げを検討されている方は、全国や他県の多発性硬化症の会にアクセスし、情報収集をしているところです。

そのような方々をつなぐ橋渡しができれば、ソーシャルワーカーとして、クライアントにとって、貴重な社会資源とつながるきっかけづくりとなります。

身近なところで、実は、そのような場を求めている患者や家族がおられましたら、福祉道場メールまでご連絡ください。

福祉道場メール
fukushidoujou@gmail.com

地域集会を企画しませんか？

地域集会の内容

（１）形式（講演会、勉強会など）やテーマについては、各地区の世話人を中心に企画することとする。なお会員の自主的な企画であっても世話人が認めるものであれば可能とする。

（２）内容の選定については自由だが、地域の福祉従事者が親睦を深めることに寄与するものであることとする。

（３）本会への要望、職場や地元における社会福祉士あるいは福祉を取り巻く状況、公益活動の可能性について考える場とすること、若しくは地域における研修活動を行う場とすることが望ましい。

（４）集会の開催により、会員の加入促進を図る。

費用の補助

（１）会員宛の開催案内を送付するにあたり、参加者を募集する地域の地区在住、在勤の会員の人数分の切手と宛名のタックシールを支給する。

（２）会場使用料のうち一回当たり５，０００円を限度として実費を補助する。

（３）講師謝礼のうち一回当たり１０，０００円を限度として実費を補助する。

（４）開催案内、チラシ、研修資料の印刷代のうち一回当たり５，０００円を限度として実費を補助する。

（５）地域集会申請様式により切手等を支給し、地域集会報告様式の提出により会場使用料ならびに講師謝礼の補助を行う。

社会福祉士会HP
地域集会情報
http://www.cswchiba.com/?cat=4

【会員名簿に関するお詫びとお知らせ】

2025年６月3日

千葉県社会福祉士会 会長　澁澤 茂

平素より本会の活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

千葉県社会福祉士会では 2016年から会員名簿を発行しています。会員に登録いただいた情報のうち、①氏名、②居住地（市区村町名のみ）、③勤務先、④勤務先住所、⑤勤務先電話番号、⑥所属する地域集会、⑦所属する委員会、⑧会員番号、⑨フリガナを掲載するものですが、このうち①⑨以外はご本人の希望を伺って、希望されない場合は非掲載にさせていただいています。そもそも全部の掲載を希望されない場合にはそのようにもさせていただいています。

2025 年度の会員名簿につきまして、事務上の取り扱いにミスがあり、８名の方が希望されない情報を掲載したままの名簿を、51 名の代議員の方々に送付してしまいました。
このことにより、ご本人をはじめ、会員の皆さまにご迷惑とご心配をおかけしましたことを、心よりお詫び申し上げます。
掲載を希望していない情報を誤って掲載してしまった方にはすでに連絡をしており、送付してしまった代議員の方からは回収の対応を進めています。ご協力をいただいている皆さまには、深く感謝申し上げます。

本会では今回のご意見を真摯に受け止め、個人情報の保護および名簿提供のあり方を改めて見直す必要があると判断いたしました。そのため、今年度の会員名簿の発送は見合わせております。

現在、本会では個人情報保護ガイドラインに基づき、再発防止策の検討と名簿の運用に関するルール整備を進めております。

また、本件の対応にあたっては、外部の有識者を含む「調査委員会」を設置し、客観的な視点による検証と、再発防止に向けた提言をいただく予定です。

今後の対応方針につきましては、決定次第、改めてホームページや「点と線」などを通じてご報告いたします。

なお、本件に関してご不安やご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。

【お問い合わせ窓口】

千葉県社会福祉士会 事務局

TEL：043-238-2866（平日 9:00～17:00） E-mail：office@cswchiba.com

引き続き、会員の皆さまの信頼にお応えできるよう、誠意をもって対応してまいります。何卒ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

研　修　等　・　行　事　の　お　知　ら　せ

※研修等が新たに決定した際にはホームページに随時掲載致します。是非チェックしてください。
千葉県社会福祉士会ホームページ：https://www.cswchiba.com/

令和７年５月31 日現在の会員数

正会員　1,731 名	準会員　１名	賛助会員　2名	合計　1,734 名	